

P-111

先天性心疾患のある人がとらえる思春期から青年期における「病気と自分の関係性」の変容 -SCAT: Steps for Coding and Theorizationを用いたビジュアル・ナラティブの分析-

遠藤 晋作¹⁾、上田 敏丈²⁾、大橋 麗子¹⁾¹⁾名古屋市立大学 大学院看護学研究科、²⁾名古屋市立大学 大学院人間文化研究科

【目的】

先天性心疾患患者のある人がとらえる思春期から青年期における「病気と自分の関係性」の変容を明らかにし、病気とともに生きる子どもを包括的に理解し、成長発達を尊重した医療者支援の針路を示唆すること。

【方法】

青年期の先天性心疾患のある人を対象とした。調査時期は2024年6～12月、調査方法はビジュアル・ナラティブを用いた三項関係ナラティブ実践調査を行い、「病気と自分の関係性」を中学生時と現在の2時期を描画してもらってから、非構造化面接にて描画についての語りを各々得た。分析は描画と語りを一まとめデータとしてSCATを用いて理論記述を得た。本研究は所属機関の研究倫理委員会より承諾を得て実施した。

【結果】

4名の男性から協力を得た。年齢は19～23歳であり、現在も2名に運動制限と1名にチアノーゼ症状があった。ビジュアル・ナラティブの理論記述により、思春期には周囲との関係性の中から病気に起因する不安全感を抱くが、青年期には病気への理解を深めて自己のあり方を見出していく変容が明らかになった。象徴的な2事例の理論記述(下線はSCATにおける構成概念)として、中学生時から現在にかけて、Bは「病気を周囲と同じであることへの壁と感じながらも周囲と同じ階段の強行的登攀(制限があってもクラスメイト同様の活動を行い、周囲と同じ階段を強行的に登ることをしていた。)」から「制限から見出した役割と病気体験から見出した将来像をもって人生の岐路の選択的邁進(自分に適した道を見つけて選択的に突き進んでいくこと)をしていた。」、Dは「病気に対する矛先の定まらない怒り転嫁により病気との敵対(嫌悪する敵である病気と対峙すること)をしていた。)」から「恒常的にまとわりつく病気を認識しつつも不快事象脱落による開放(嫌な出来事から木になった実が脱落するように開放されること)を重ねて理解者から活力を得た自己発展(木に見立てた自分が、土や根に見立てた友達から活力を得て発展すること)をしていた。」という変容が示された。

【考察】

先天性心疾患のある人は、青年期には自己のあり方自分なりに見出すことが示されたが、複数の先行研究から青年期の社会適応の困難が指摘されており、そのあり方については改めてとら直す必要があると考える。医療者には、病気への対応だけでなく思春期に抱える不安全感に寄り添って、包括的にその人なりの自己を育む手助けをする役割が求められる。

P-112

日本のCLS(Child Life Specialist)の専門性に関するフォーカスグループインタビュー調査

富崎 悦子¹⁾、瀬端美沙子²⁾、添田英津子¹⁾、小澤 典子¹⁾¹⁾慶応義塾大学、²⁾ピッツバーグ大学

【目的】子どもの病気の治癒率が上がる一方、長期に渡る治療環境の中で、子どもや家族の心理的負担が課題である。医療現場では心理社会的支援の専門職としてCLSは求められ、活動している。米国ではCLSの取り組みは広く認知され、子ども病院や小児病棟だけでなく、ホスピスや児童虐待一時保護施設などでも活躍し、約600の施設でCLSの取り組みが展開されている。一方日本では、1999年にはじめて国内の病院でCLSが勤務し、現在50名程度が病院を中心に勤務している。しかし、米国と比較し、数が少なく、未だその役割は広まっていない。医療専門職の間でも、CLSの専門性への理解がされにくい状況もある。そこで、本研究では、CLSがどのような活動をし、どのような役割を担っているのか、他の専門職との連携状況などについて質的帰納的分析を行い、CLSの専門性を明らかにすることを目的とした。【方法】対象者およびリクルート方法：日本の病院でCLSとして勤務しているCLS。日本CLS協会のホームページに記載されているCLSが務めている病院を参考に19か所にポスターを郵送した。調査方法：ZOOMを用いたオンラインによるフォーカスグループインタビュー(FGI) 調査期間：2024年2月調査内容：CLSとして働いている際に大切にしていること。CLSとして働いている際に困ったこと。CLSとして求められていること3点を中心にインタビューを行った。分析：インタビュー内容の逐語録をもとに、重要アイテムの抽出、重要カテゴリーやサブカテゴリーの分類を行い、質的内容分析を行った。【結果】9名のCLSに対してFGI(3名参加のFGIを3回)を行った。CLSは、子どもが置き去りにされたと感じないように「子ども自身」「家族」「他職種」の調整をしながら、療養生活を支えていた。子どもを軸に考え、子どもの力を最大限に引き出すよう関わりを行っていた。時には家族や他職種が、その子どもの力を感じられるように働きかけ、子どもへの継続的な支援がなされるよう工夫していた。その中で、他職種に自身の役割を伝え、必要な時に子どもや専門職に関われるような土台作りに困難を覚えていることも明らかとなった。【考察】日本のCLSが担っている役割が明らかになった。医療の高度化に伴い、更にCLSは求められる専門職となると言える。今後CLSについての理解を広げ、CLSの専門性を多くの方に理解してもらい小児医療現場で活躍出来るような、社会づくりが必要であると考えられる。